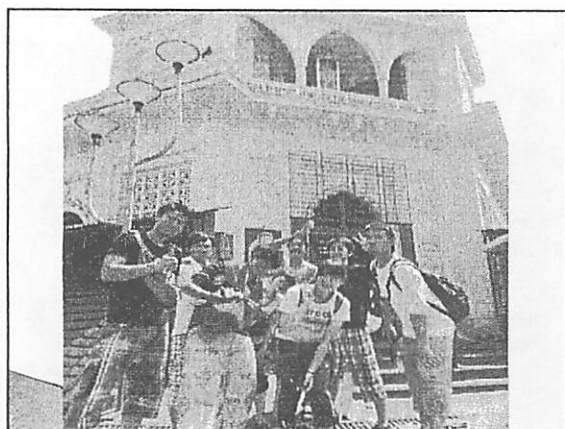


インドで感じ取ったこと。

- ▶ 自分の「世界の狭さ」を知った。
- ▶ 何も知らない自分が見えた。
- ▶ 「自分を大切にしたいな」と感じた。
- ▶ 外国に目を向けるきっかけになった。
- ▶ 日本の常識は外国の非常識ともなる。



私たちの経験から伝えたいこと

- ▶ 発見から行動へ！
- ▶ 繋がる事の大切さ！
- ▶ 無関心の怖さ！
- ▶ もっと自分を知ろう！

2012年度

春期体験型 プログラム 報告書

アメリカ

インタテイメント・

マーケティング

体験セミナー

オーストラリア

共生社会

体験セミナー

ヨーロッパ

エコスタディ

インド

異文化・ボランティア

体験セミナー

桃山学院大学

Momoyama Gakuin University

インド異文化ボランティア・体験セミナー

CVindia13 メンバー紹介

- ★中村 賢 (けんくん) 3回生…9人のまとめ役。頼れるリーダー系
- ★林 貴昭 (やしー) 3回生…とまあえす笑いに変わってくれるお兄ちゃん系
- ☆粉河 真理子 (こかわちゃん) 2回生…落ち着いて見守ってくれるサポート系
- ☆小杉 磨未奈 (まみたず) 2回生…皆のムードメーカーで天然系
- ★谷口 直哉 (まよ) 2回生…ゆっくりでマイペース系
- ☆中平 菜摘 (なっち) 2回生…何事にも活発なアクティブ系
- ☆乗京 亜美 (のりきょー) 2回生…おっとりいじられ系
- ★花田 大樹 (はなちゃん) 2回生…喋りだすと止まらないおしゃべり系
- ★宮本 友紀也 (もち) 2回生…何でも聞いてくれる癒し系
- ★伊藤先生 (ﾌﾟﾛﾌｪｯｻｰ) …歩く辞書の Professor Ito
- ★松岡先生 (まっちゃん) …自虐がすごいアイドル
- ★チャタジーさん (チャタさん) …紳士! インドでのガイドさん

伊藤先生↓

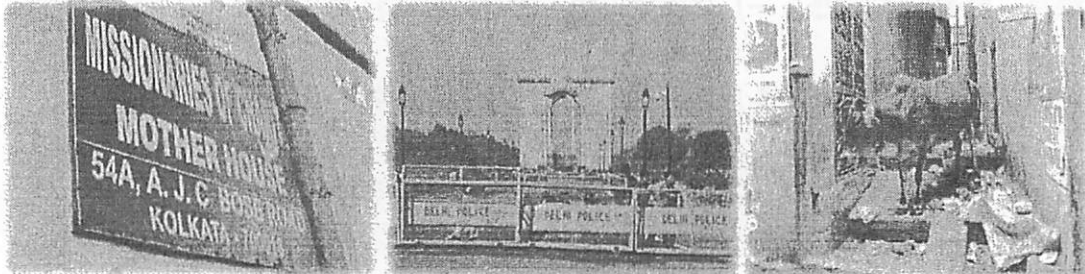
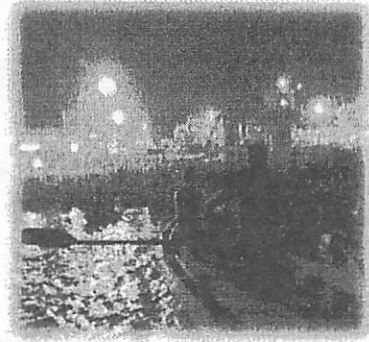
松岡先生↓ チャタさん↓



集合写真タージマホールにて↑

★ 1週間目の視察地一覧 ★

- ジャーマ・マシッド⇒インド最大イスラム教モスク。
- ラージガート ⇒ガンジーが火葬された場所。
- クトゥブ・ミナール ⇒世界最高のミナレット。
- グルドワラ ⇒シク教の寺院。
- インド門 ⇒第一次世界大戦、インド帝国兵士追悼碑。
- ガンジー博物館 ⇒ガンジーの最期の地
- タージマハル ⇒本当!!!とにかくすごい!!!
- アーグラ城 ⇒シャージャハーン幽閉の城。
- イティマド・ウッダウラー廟 ⇒別名ベビータージ。
- ガンジス川 ⇒夕方のお祈りの様子が綺麗!
- ダニエル村 ⇒ヴァラナシの自給自足の村。
- シヴァアンプル(ヴァラナシヒन्दウー大学) ⇒シヴァ:破壊の神。
- ガンジス川 ⇒TVでしか見たことなかった沐浴している人だらけだった!



★ ハプニング一覧 ★

2月23日 @デリー

- 観光初日。出発後、ものの数百円で検問に引っかかる! 30分程足止めを食らう…。

2月24日 @デリー

- インド門がデリー警察により封鎖! 21日に起こったハイデラバードでのテロが原因だそう。
- アーグラまでの移動車内。マヨだけ座席が離れて現地人3人と一人で相席に!

2月25日 @アーグラ

- 賢ク、39度近い発熱にもかかわらず、意地でタージ・マハル観光!
- レストランで亜美の誕生日パーティー! チャタさんの粋なサプライズ!
- 駅で電車を待っていたその時、乗車予定の寝台列車が運行取り止めのアナウンス!!!
急遽バスでバラナシに向かうことに…。約12時間のバス移動となった。前代未聞だそう(笑)

3月10日 @コルカタ

- 賢クが携帯電話をタクシーに落っことしてしまった! 今までの写真が…。

3月12日 @コルカタ

- 亜美、賢ク、大樹が乗ったタクシーが迷子に! 途中で降ろされ運賃要求を拒否。現地インド人10人程に囲まれ、反抗。断固として支払わず、別のタクシーを拾ってマザーハウスに何とか到着。

いろいろあったな~(笑)

★ ニューデリー～アーグラ ★

2月22日(金)

- ✓ 現地時刻の夜中1時にインドに到着。約20時間の移動でメンバーは疲労感があった。そこから約1時間かけ、宿泊先のホテルへ向かう。深夜にも関わらずものすごい車の量だった。クラクションの音が半端ではなく、交通整理も日本のように整備されていないのでゴチャゴチャとした印象を受けた。

2月23日(土)

- ✓ 朝からニューデリーを観光。私たちが到着する前にテロがあった為、警察官に検問を受けたことも印象に残っている。観光地は様々な場所を巡ったが、最も印象的だったのが、“インドの父”とされているガンジーが火葬された場所、『ラージガート』だった。ガンジーの死後から何年も経っているのに、人々はイギリスからの独立に尽力したガンジーを心から崇拝しているように思えた。

2月24日(日)

- ✓ インド門へ向かい入ろうとしたが、21日のテロの影響でデリー警察が封鎖。中に入ることができなかった。その後、ガンジーが暗殺された場所を訪問。たくさんの花がたむけられておりやはりここでもガンジーの偉大さを認識できた。
デリー観光を終え、次の目的地であるアーグラへ電車に乗り移動した。

2月25日(月)

- ✓ この日はインドの観光では絶対に忘れられない場所、『タージマハル』を見た！
タージマハルは1日2万人を動員する。22年かけて建てられた王の妃のお墓で、完璧な左右対称、真っ白な大理石すべてに心の底から圧倒され感動した。
現在、世界の建造物で最も美しいとされており、一目見ればその言葉が納得できるはず！
是非もう一度見たいと思える美しさだった！
予定の電車が運行中止となり、急遽バス移動を強いられた！辛かったが、今では良い思い出！

2月26日(火)

- ✓ バスでアーグラから約12時間走り続け、12時過ぎにやっとヴァラナシ到着！
夕方、リキシャーに乗ってガンジス川へ行き、船の上からお祈りを見る。

2月27日(水) 早朝、ガンジスの日の出を見に行った!!! (写真次頁左)

- ✓ 自給自足で生活しているダニエル村に行き、インドの産業発展について学ぶ。
午後からはヴァラナシヒन्दウー大学に行く。

2月28日(木)

- ✓ 朝、6時過ぎにホテルを出発して、ガンジス川へ朝のお祈りを見に行く。
仏教の聖地サールナート、サールナート博物館、遺跡ダメークストウーパを見る。
マクドのバーガーを持参して夜行列車にコルカタへ向かう！

とても多忙で、めまぐるしいスケジュールだったけど、

本当に意味のある良い経験ばかり!!!

★ コルカタ ★

3月1日(金) 11時頃コルカタ着。

- ✓ 宿泊先の The Ramakrishna Mission Institute Culture はとてもキレイ！(写真右下)
マザーハウスでボランティア登録。
夕食後。インド在住・じゅんこさんという方にインドの暮らしについて聞く。

3月2日(土) ⇒ボランティアがスタート!!!

- ✓ ボランティアは午前中に行う！毎朝6時半にタクシーを拾い、マザーハウスで朝食をとった後、各々が配属先施設でボランティア！

3月3日(日)

- ✓ これまでの1週間を振り返り、パワーポイント製作。班ごとに分かれ発表！

3月4日(月)

- ✓ インド在住、天理教の川浦さんからインド人のモノの考え方についてお話を聞いた。

3月5日(火)

- ✓ 在コルカタ日本国総領事館でお話を伺い、夕方からマーケットで買い物

3月6日(水)

- ✓ 日本語学校の学生たちと交流。

3月7日(木)

- ✓ ボランティアがお休みのため、午前中は Loreto Day School を訪問。
午後はエリザベスメモリアルとタゴールの家に行き、その後各自フリータイム！

3月8日(金)

- ✓ サウスモールやマーケットでお土産などをお買い物！

3月9日(土)

- ✓ 午後は自由時間だったが、プレゼンの準備で皆、大忙し！(笑)

3月10日(日)

- ✓ 夕方、学生だけで日本人のシスターとブラザーのお話を聞きにマザーハウスへ。

3月11日(月)

- ✓ 領事館で領事と日本語学校の学生たちと会食。久々の日本食に歓喜!!!

3月12日(火)

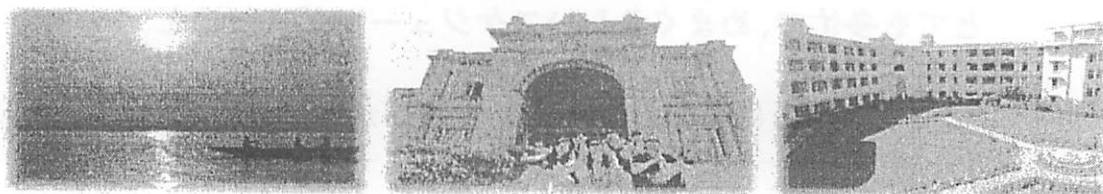
- ✓ コルカタ動物園に行き、ニューマーケット(ショッピングセンター)で買い物♪

3月13日(水)

- ✓ ボランティア最終日。午後は3回目のプレゼンを行い、RMIC をチェックアウト。
インドの演奏を聴きながら、プログラム最後のインド料理。←なんだかさみしい。

3月14日(木)

- ✓ 深夜2時にコルカタを発ち、翌日18時に関空到着！



★ ボランティア先紹介① ★

～Nirmal Hriday(ニルマルヒルダイ)～

施設の門をくぐったと同時に異臭が鼻に突いた。「死を待つ人の家」と命名されている由縁が理解できる。施設には約100名(男性50名、女性50名)の重病の老人が施設利用している。結核、脳膜炎、栄養失調、マラリア、様々な病を持つ人がいる。インドではカースト制度(法的には存在しない)で貧富の差が激しく、低カーストの人は路上に棄てられることが多いので「せめて死ぬときくらいは人間らしく…」という思いからこの施設が作られた。

「死を待つ人の家」という重々しい別名を頭に入れていたので、利用者さん全員が寝たきりだろうと思っていた。ボランティア一日目初めて利用者さんを見たとき、綺麗に並んで椅子に座っていた。張り詰めていた気持ちが少し緩んだ気がした。しかし日が経ち利用者さんと触れ合うことが多くなって重症が感じとれた。

私たちがボランティアでした仕事は大きく分けて洗濯、食事補助、掃除の3つである。最初にすることは決まって洗濯である。人が10人入れそうな巨大な槽が4つありそれぞれ薬の濃度が違う。一番濃い液には糞などがついたズボンなどを洗って他の槽へ移していき、洗い終わったものを屋上へ運び、インドの曇一つない空と太陽の下で干した。

自分で食事が出来る人は半分くらいで、食べられない人にはカレー(毎日カレーだった)をスプーンですくって食べさせてあげる。口に含んで咀嚼すると口から流れ出てくるのでタオルで拭いてあげる。食事が終わるとベッドまで運ぶ。この時かにかがりかがりやせ細っているのか痛いほど伝わってきた。ベッドまで運び終わると、床や窓の掃除をした。(この時女性陣は食器を洗っていたと思う)ベッドの周りを歩いていると異臭がし、目を向けるとベッドに排泄物が垂れ流しになっていた。トイレにひとりでいけない人は山ほどいた。トイレまで2人で運んでズボンを脱がしてやり、尻に水を掛けてやり新しいズボンを履かせたりした。他にも様々なことをさせていただいたが、大まかにはこんな感じである。もしこのプログラムに参加するならば率先して自分ができることを考えて探してたくさん行動して欲しいと思う。施設内の撮影は厳禁であったため、現地で出会った仲間たちと記念撮影。



★11日間のボランティアを通して①★

- ◇ 初めてニルマルヒルダイの利用者さんたちを見たときは、案外みんな元気そうやなあと感じ、わたしがイメージしていた瀕死の人がいるような「死を待つ人の家」とはかなり異なりました。だけど、利用者さんのお世話をしながら接していく内に、話すことも難しく、体も動かせない、お金も住む家もない状態の人たちがこの地で生きていくことは難しい…ですので、

彼らは死を待つしかないのだということが理解できました。そんな身も心も寂しい状態でいる利用者さんには、シスターやマンシー・わたしたちボランティアからの愛を受け取って、あの場所で最後まで明るく生きてほしいと思いました。(粉河)

- ◇ 今思い返してみると、ポーッと突っ立っている時間が多くあった気がする。何をしたらいいのか、利用者さんが何を望んでいるのか本当に分からなかった。そんな中周りを見て自分に何ができるのか必死になって探していた。最初は利用者さんに近寄ることに畏怖を感じていた。しかし少しずつ接していくにつれて、手を握ったり笑顔を見ることができて畏怖の気持ちは払拭され、もっと接したいと思うようになった。ボランティアで様々な外国人と話ができ楽しかった。それと同時に、自分の英語力の無さに失望した。このボランティアを通じて私はひとまわりもふたまわりも成長したと思う。このような体験はなかなかできないと思うのでしっかりと胸中に収めたいと思う。(谷口)
- ◇ 私はこのプログラムに参加するまで、ボランティアをした事はありませんでした。私の祖父も祖母もまだ元気なので、介護もした事はありません。インドで人生で始めてボランティアを経験しました。最初施設に入ったとき臭いでやられそうになりました。薬品の匂いとアンモニア臭の混ざったような不思議な匂いでした。最初は色んな意味で抵抗がありました。しかし3日もすると慣れて、それが当たり前になってきました。人という生き物は忍耐する事が可能な生き物なんだと思います。私はそれをこのプログラムで学びました。まだまだ書き足りない事だらけですが、これでまとめとさせてもらいます。本当にこのプログラムに参加して本当によかったです。ありがとうございました(林)
- ◇ ボランティアを通して幸せに対する感じ方が変わりました。今まではおいしいものを食べた時、欲しいものが手に入った時、自分の好きなことをしている時が幸せでした。今はいつも家族や友達がいること、毎日楽しく過ごせること、毎日おいしいごはんを食べられることが本当の幸せではないかと思うようになりました。今までの私の幸せは自分本位で自分の欲を満たすことだけが幸せなのだと思っていました。本当の幸せはマザーハウスでのボランティアに参加したからこそ得ることができた気づきだったと思います。日本で生活する中で当たり前となっているため忘れがちですが、本当はとても幸せなことで、世界に目を向けると決して当たり前ではない事実でした。この経験は自分にとって大きな糧になり、毎日の生活を見直す貴重な機会となりました。(乗京)
- ◇ ボランティアで私が得た最大のものは、チャレンジすることの大切さでした。誰しも嫌だと思っていること、苦手だと感じていることがあると思います。私は介護なんて絶対に無理だと思っていました。でも、毎日施設にいる人を見ていると何かしないと来た意味がないと感じ、活動に取り組みました。意外にやれるなということがわかりそれから様々なことにチャレンジしようと思えるようになりました。この気持ちは日本に帰国してからもずっと大切にしています。人それぞれ得られるものは違いますが、確実に成長を感じられる体験になると私は思います。(中村)

★ ボランティア先紹介② ★

～PREM DAM(プレムダン)～

◆ 主な一日の流れと私達がした内容

AM 8:00 大量の洗濯を手洗いで開始！

AM 8:00 利用者さんとお話したり、マッサージをしたり♪
マニキュアを塗る、折り紙、お絵かき、髭剃り e t c …

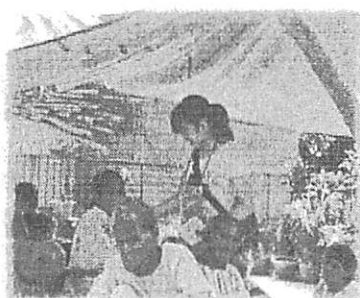
AM 9:00 利用者さんのチャイタイム☆
ビスケットとチャイを配る。

AM 10:00 ボランティア休憩タイム☆
世界中から集まるボランティアと交流するもよし、ひとりでプレムダンを感じるもよし♪

AM 11:00 利用者さんのランチタイム☆
配膳、食事介助をさせてもらう。食器の回収、洗い物。
利用者さんをベッドまで移動のお手伝い。

PM 12:00 ボランティア終了

※時間はおおまか。内容も指示されるわけではなく、自分のやりたいことを、自分のやりたいようにするのがプレムダンのスタイル。



↖ PUREM DAM での日々 ↗

★11 日間のボランティアを通して② ★

- ◇ ボランティア期間の 11 日間、施設利用者との関わりの中で自分の嫌な部分を見せつけられる事が多かったと感じた。初めのうちは利用者さんに「触れる事」に少し戸惑いがあった。ただ、そんな戸惑いは 2 日もしない間に気にならなくなる。すぐに「彼らのために何が出来るか」という事を考え、言葉が通じない中で数人の利用者さんと関係を築いていく事が楽しくなっていた。しかし、関係を築いていくうち、逆に「触れられる事」が多くなり、そのことに大きな戸惑いを感じた。頼られる事が怖かったのだと思う。いざ求められた時に「その要求を満たしてあげられるだろうか」そんな不安があった。これが、自分自身の器の小ささ、嫌な部分を最も感じた瞬間だった。そうして、嫌な自分と正面から向き合いながらも、止まる事無く進んでいく毎日を手探りで進んでいった 11 日間には、インドでしか成し得ない成長があったと、とても感じている。そう、きっと！この成長が新しいスタート!!! (花田)

- ◇ 2 週間のボランティアをして気づいたのは、本当に自分から何かすることを見つけないと何もすることがないということです。自分から何かを始めないと何も始まらないということ学びました。今まで勝手にできないときめつけて諦めていたこと沢山ありました。でも何かを始めることの大切さ、始めないと分からないこともたくさんあるということに気づきました。この 2 週間は毎日が新しい気づきでいっぱい、自分自身を見つめ直す、自分とはどういう人間なのか深く考えることができた毎日でした。この経験を無駄にはせず、ここからがスタートだと思っっているんなことにもっと挑戦して行こうと思います。(小杉)

- ◇ プレムダンでのボランティアは 2 日もいれば内容をつかむことができる。誰にも何も指示されない中で自分はどう動くか。それがいつも私の中心にあった。なぜそれが自分の中心なのかと考えた時、私は“私を見て欲しがっている自分”がいることに気づいた。その自分に気づいた時、私は自分がもの凄く嫌いになった。周りは気にしていないようで本当はもの凄く気にしている自分。周りと比べたがっている自分。そして絶対に人にも自分自身にも負けたくないと思っている自分。でもその勝ち負けの基準は自分が勝手につけたものでぜんぜん意味のないものだし、そんな意味のないこと意味がないとわかっていながらも、やっぱり張り合ってしまったっている自分。ジュンコさんのお話してくれた“インドは鏡”というお言葉がぱっと浮かんできた。目を背けていた自分の一面に向き合うことができた。(中平)

- ◇ プレムダンでは何をするかは特に決まっておらず、自分から行動を起こさないと何も始まりません。初めは本当に何をしたいのか分からなくて戸惑うことばかりでしたが、得るものは本当にたくさんありました。毎日同じ場所に行ってほとんど同じ作業をしているはずなのに学ぶことはたくさんあって、感じることも日によって違います。それがプレムダンです。二週間プレムダンでボランティアを行って、本当にいい経験ができたと思います。PREM DAN。PREM は愛、DAN は贈り物を意味します。私は PREM DAN でたくさんの愛を与えてもらいました。(宮本)

★ プログラム、21 日間を通して ★

- ★ インドの様々な面を見て気づいたことは、インドの人たちは宗教に対しての信仰心が強く、普段の生活とともに根強く宗教が関係しているということでした。生きていくなかで祈りや神をととても大切にしていることに感動しました。常に人と共に行動して外部からの情報が遮断されて過ごした3週間は、自分と向き合う大切な時間にもなりました。そして、インドで過ごした貧乏で貴重な時間のなかで感じたこと・気づいたことを普段の生活でも忘れることなく、これからの自分に活かしていきたいです。(粉河)

- ★ 予定の電車が急遽運行中止になり、荷物で身動きが出来ないバスでアーグラ～バラナシ間を約12時間のバス移動。物売りの少年にタージマハルの置物(スノードームみたいなもの)を手渡され、かってに交渉成立。10ドルを要求され、「どんとはぶだら一ず」と言っても無視。その場に品を置き、バスまで追いかけられた事。バラナシの駅で野生のサルが暴れ出し、インド人と一緒に焦った事。窓を開けようと押したところ、ガラスが割れ、腕を突っ込み、1人フロントで謝った事。マザーハウスまでのタクシーで、道を知らず、迷い、途中で降ろされ、運賃を要求されたので「嫌」と言い、現地人10人程に四方八方を固められながら対抗した事。他にもたくさんの事が起こった。きっと強くなった。インドには素晴らしいパワーがある！行けばわかる。是非行ってほしい。また行きたい。絶対行く！待ってなインド!!! (花田)

- ★ 「知ることで世界は広がる。」私が生きてきた世界がいかに狭いかをこのプログラムで感じさせられました。今やテレビやインターネットが普及し、世界各地の映像や状況がいつでも見ることが出来ます、しかし、それだけでは本当の reality は見えてこないでしょう。実際に自分の足で現地に行ってみなければ分からないことがたくさんある。私がインドで学んだこと、それは私が何も知らない無知な人間であるということです。当たり前が当たり前じゃない、自分の知らない文化、常識、習慣、このプログラムに参加したことでたくさんのことを学びました。インドでの経験を胸に、私はこれからも reality を追い求めて行動を続けていきたいと思えます。(宮本)

- ★ インドに行って「英語が話せれば…」と何度も感じました。またこれをきっかけに。もっと英語を勉強したい。英語を話せるようになりたいと思うようになりました。次に、他の外国にも行ってみたいと思いました。マザーハウスで知り合った同じ年齢の子が1人で世界中を旅しているのをみて、本当にかっこよくてたくましいなと憧れました。英語を勉強して私も1人で世界を旅したいという目標が見えました。まず第1歩、夏休みを利用して1ヶ月間イギリスで短期語学研修に参加してきます。(乗京)

- ★ 20年間ずっと日本に居たので、たった3週間という短い期間だが、はかり知れない刺激を受けた。宗教は堅苦しいと思いを背けていたが、宗教の様々な側面を見ることができた。貧富の差があまりにも痛々しく感じとれた。その証拠に「物乞い」というキーワードが私たちの議論の核となって胸に刻まれ忘れがたいものとなった。インドの人達はとても明るく親切だった。すべてが日本と異なっていて、その違和感が私を恍惚とさせていた。私は違和感が生ん

だ恍惚を求めてもう一度インドへ行きたい。(谷口)

- ★ インドから帰ってきて自分がやりたいと思ったこと諦めていたことにどんどんチャレンジしていこうという気持ちになりました。インドでの生活は私にとってありのままの自分で居ることができた場所でした。本当に毎日自分の嫌な面があからさまにでてくる場所であって、毎日悩んで、自分とはどういう人間なのか考え、見つめ直すことができ、新しい発見で新しい自分に出会えるとても貴重な日々でした。私の人生の中で三週間はごくわずかな時間かもしれないけど、一生忘れることができない本当に濃い三週間になりました。インドに行って良かった。それで終わるのではなく、ここからが新しい自分のスタート地点だと思っています。このプログラムに参加できたことに本当に感謝しています。(小杉)
- ★ 私はこのプログラムに参加し、実際インドに行くまで、インドに対しての知識というのは「カレー」か「額に赤の印を塗る」ぐらいでした。しかしいざ行ってみてそのイメージというのはガラッと変わりました。行く前にインドに対して抱いていたイメージというのはあながち間違いではありませんでしたが、そんな事でまとめてしまうのは失礼というような気持ちになりました。色々観光したり、ボランティア活動をしたりしましたが、何か別世界に来たような気分でした。国が違うだけそこまで違うのかと思いました。でも我々日本人と言葉、顔つきが違って同じ人間は人間なんだなあと言うのも率直な意見です。このプログラムを通じて、「色々な国に行ってみよう」と本気で思いました。このプログラムに参加して本当によかったです。(林)
- ★ わかっているようでわかっていた自分の側面をこのプログラムを通して知ることができた。というか見せつけられた。私は今も私の中の何かが大きく変わったという実感はない。だからこそこのプログラムで体験したことは私の人生にずっと付きまってくる気がする。私が避けていたふたつの側面をこのプログラムを通してまじまじと見せつけられたから。どうすれば克服できるのかはまだわからない。だからこそ自分を見つめ直す時間を作り続けようと思う。そうすれば動いていることで見えなかったものが見えるかもしれないから。自分にとって“立ち止まる”ということは“動き出す”ということよりも勇気がいることだ。でも立ち止まってみる大切さはプレムダンで学んだつもりだ。私は自分を客観的にみるために、想像できないことを受け入れるために、あるいは自分の中にはいつてきてくれようとする他の事柄を受け入れるためにたまに立ち止まろうと思う。(中平)
- ★ 私はインド異文化・ボランティア体験セミナーを通して、様々なものを得られました。貧富の差、宗教を真近で感じられる場所、動物が普通に横を歩いて行くことなど日本では非日常なことがたくさんあった。この日本と比較したり、日本の常識とは違うとどうしても考えてしまうが、異国に行くのだから違うことが当たり前と思わなければならないのではないかと学ぶことができた。多分インドと聞いて、多くの方は怖さを感じると思う。しかし、今はもう一度行きたいと思えます。それだけの想像とのギャップがあり、私の中の変化に気づけた場所だったからです。来年以降に行く方々も是非、行って見て体験してほしいと思います。(中村)

インドでのサービス・ラーニング

社会学部 伊藤 高章

国際センターの提供する海外体験型プログラムは、〈サービス・ラーニング〉としての教育的意味を持っている。

その最も重要な要素は、体験が、大学での学習や研究と結びつく、ということである。一人一人の学生が、この体験を経て、正課で学ぶべき事柄をつかみ取り、学生としての学びの動機づけを得ることが重要である。プログラムの責任は、学生の感性を敏感に磨き、一人一人がユニークに異文化やサービスの体験を味わい、衝撃を受けることである。この時代の地球市民として生きる意味を、広く深く感じることができるよう促すことである。インドが、一つの理想的なフィールドであることは明らかであろう。

インドは、本学建学の基礎であるキリスト教とともに世界三大宗教の一つである仏教が成立した地であり、またその背景をなす古代哲学を育んだ。

ガンジス川はヒンドゥー教の神ガンガーとして崇められている。

インド中世は、イスラームが支配した時代であり、デリーやアグラはイスラームの都である。言うまでもなくタージ・マハールはイスラーム霊廟である。

コルカタは英領インドの首都であり、「日の沈まぬ帝国」と言われた大英帝国においてロンドンに次ぐ繁栄を誇っていた。

現代のインドは、政治的には多宗教の共存を認める世界最大の民主主義国であり、数年以内に中国を抜いて（日本の10倍以上の人口を擁する）世界一人口が多い国になる。世界経済の市場としてまた生産地としての可能性は計り知れない。また、ITをはじめとする知的生産性も極めて高い。その一方で、社会のインフラ整備、貧困・格差、人権問題等には多くの課題を抱えており、国際社会からの様々な協力を必要としている。

世界の諸価値がここに渦巻き、人間の英知の深さとともに、それを生きる人間が抱えざるを得ない困難が、生々しく迫ってくる。

このプログラムに参加した学生を、講義科目の教室で見かける。

彼ら彼女らの学びに向かう姿勢は、他の学生と明らかに異なる。学ぶべきものを模索しつつ、世界に向けて自分の果たすべき役割を担う責任を感じている学習者の眼差しをもっている。教育者として、彼ら彼女らを誇りに思う。そしてその人生が幸多きものであることを祈る。

自分自身と向き合えた「インド異文化・ボランティアセミナー」

経済学部 松岡 敬興

体験活動の醍醐味は、体験することに意義を求めるのではなく、体験を通して新たな気づきをもたらされ、自分自身のこれからのための示唆が得られることにあります。残念ながら学校教育における体験活動は、前者の意味合いが濃いかもしれません。しかし、「インド異文化・ボランティアセミナー」は、正真正銘、後者に該当する中身であることを、今なお実感として持ち続けています。

セミナーを通じて、学生のみなさんが自分の時間を捻出するために、様々な工夫をしている様子が見られました。ボランティア活動、「ふりかえり」の時間、様々な交流の機会、活動報告のプレゼンテーション、など盛りだくさんの中身を一つ一つ消化しながら、自分自身の「これから」について己と向き合い自問自答できたことを喜んでいます。インドでの生活にどっぷりと浸かり、海外からの情報を全く断ち切った環境のもと、ひたむきにボランティア活動に継続して取り組むことで、真摯に自分自身と向き合おうとする姿を、伊藤先生による「ふりかえり」の面談の場面で直視することができました。「ふりかえり」の時間では、これまで、今現在、そして未来へ、自らの「これから」をどのように設計していくのか、今現在の自分自身を下支えしているエピソードやその時の気持ちなどを一つ一つ拾いあげ整理することにより、これからの生き方を見いだすことに繋がられたのではないのでしょうか。

大切なことは、その自己決定を如何に持続させ、その実現に向けて歩を進めるかということです。異文化に身を置き高揚した気持ちを、国内に戻り様々な誘惑にさらされる環境のもとで、それを貫き通すことができるのか否かについては、参加者一人一人の本セミナーにおける気づきの重みが問われています。少なくとも私の目には参加者一人一人が、その重さを実感し行動に繋がれていると確信しています。

私にとっても本セミナーは、自分自身と向き合える貴重な機会となりました。多様性を認め、生きることを全うしようとする人々の渦の中に身を置き活動することで、国内では体得し得ない価値観に接し新たな気づきを体得できました。不動の価値観に対して、それをどのように受け止めるのか、その捉え方にかかわる多様性を如何に理解し合うのか、世界を取り巻く諸課題の解決に向けた糸口がこの地インドにあるように思えました。世界各地からマザーハウスを訪れる人々の心の中は、ボランティア活動を通して自分自身と向き合い、自分探しに邁進しているのではないのでしょうか。私も同行させていただき、自分自身の「これから（次の一手）」を見据えるうえでかけがえのない体験となりました。

作成：2012年度 春期体験型プログラム 参加者一同

発行：桃山学院大学 国際センター (kokusai@andrew.ac.jp)

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1